**症例記録**

**申請者氏名:　慢性　とつこ**

**所属機関名:慢性クリニック**

(10症例の治療経過を記載下さい)

※慢性疼痛以外は受け付けておりません。

治療期間は、**3カ月以上が目安**ですが、

療法士においては1～2カ月でも治療内容によって可否を検討します。

※略語の使用について:症例報告へ初出の際には、オリジナルの単語を記載の上でご使用下さい。

※最終診療日または直近の診療日は5年以内となります。

|  |  |
| --- | --- |
| **症例No.1** | **治療機関名:慢性クリニック** |
| **患者イニシャル:　T.M****患者性別　　　　男・女****患者年齢　　　　　65　歳** | **初診日:　20X2年2月25日　　　最終診療日または直近の診療日:20X2年8月31日****病　名:　腰部脊柱管狭窄症、陳旧性胸椎圧迫骨折****治療法:　運動療法、筋力強化とストレッチ、温熱療法、経皮的電気刺激療法** |
| **治療経過(400～600字)】**20X1年5月より腰痛、右下肢痛が誘因なく生じ、近医整形外科を受診した。症状とMRI所見から腰部脊柱管狭窄症と診断され、投薬治療と仙骨ブロックを受け症状の軽快は得られたが、腰痛は残存し、理学療法が必要と判断され療法士の常在する当クリニックに紹介受診となった。　腰痛は、NRS 6で主に臀部や鼠径部周辺に痛みを訴えていた。軽度の円背を認め、痛みは特に動き始めや前屈時に増強し、長く座っていられなかった。両仙腸関節部に圧痛も認めており、主に仙腸関節由来の痛みと診断した。立位の姿勢は悪く骨盤アライメントは後傾し非協調性の動きが認められた。理学療法の目的は、姿勢改善を図り痛みの軽減とし、姿勢保持が出来るように骨盤周囲筋の筋力強化や股関節周辺、特に内転筋・大殿筋、腹筋や背中から腰の筋群のストレッチを進めていった。股関節可動域の改善を目指し、また特に骨盤の動きに着目した歩行に対する運動療法を行った。さらに腰部から下肢にかけての温熱療法や仙腸関節部への周波数変動（5～250Hz）を用いた経皮的電気刺激療法も併用した。　20X2年6月頃には、徐々に姿勢や歩行時の股関節可動域は改善し、痛みはNRS 3程度でADLも改善傾向となった。現在は、1回/月程度、意欲を高めるように支持しながら自主的にできる運動やストレッチの指導・教育を中心に行い、温熱療法と経皮的電気刺激療法を併用しながら治療継続している。**痛みに対し専門性を持って評価し、それに対しどのような治療をおこなったか**を具体的に記載してください。この症例から学んだこと】　痛みの原因と共に伴う姿勢や筋肉の動かし方の異常を評価することが重要であることを再確認した。それを改善させる運動療法やストレッチを行い、患者に必要性を理解いただき教育することも大切であった。経過をまとめたサマリーではありませんのでご注意ください。**今後の治療に役立つこと等を記載**してください。 |

\*

※この用紙をコピーしてお使い下さい。